



第2章

シスターという生き方

昇る朝日

幕末の開国とともに来日したプロテスタント宣教師の中には女性たちもいました。さらに明治維新以降は、男女同権が唱えられ、欧米の女性のより自由で主体的な生き方が紹介されるようになりました。中でも、結婚することも家族を持つこともなく、生涯を神と人間に奉仕するカトリックの女性修道者(シスター)という存在は、それまでの日本人が全く知らない新しい人生への窓となりました。

「あなたは多くのことに
思い悩み、心を乱している。
しかし、必要なことは
ただ一つだけである。」

(ルカによる福音書10・41・42)



修道会とは？

キリスト教において「修道者」はもともと世俗を離れて、祈りと黙想のうちに過ごす生き方をする人びとを指し、そのような人びとが共に住み、自給自足の生活を営む場所を「修道院」、その共同体を「修道会」と呼びます。その生き方を貫くために、修道者は「貞潔」（結婚しない）、「清貧」（自分の財産を持たない）、「従順」（目上の命令に従う）という3つの誓いを立てるものとされています。こうした修道制の原型は4～5世紀に生まれ、西欧では6世紀のベネディクト会によって確立しました。その後、これを基本としつつ、時代の変化や社会のニーズに応じて様々な形態や目的を持つ修道会が誕生しました（13世紀の托鉢修道会など）。西洋では16世紀の宗教改革後、カトリックでも信仰の刷新を求める運動が強まり、男子修道会では宣教を目的とする修道会（イエズス会など）、女子修道会では、混乱する社会の中で教育、医療、福祉などに従事する修道会が数多く生まれました。明治維新後に日本に入ってきた女子修道会の多くもそのような修道会でした。

なお、歴史的には、女子修道者の呼称は言語によって異なり（英語「シスター」、フランス語「スール」など）、また役割の違いによって呼び分ける場合もありますが（「マザー」と「シスター」など）、本展示ではすべて「シスター」という呼称で統一しています。

シスターになるまでの道のりは、修道会によって違いがあり、また時代と共に変化していますが、おおよそ次のようなプロセスが一般的です（カッコ内の年数は、現在の聖心会の場合）。

1.

志願期（半年～2年）

入会希望者は、それぞれの状況に合わせて修道生活を体験しながら、意思と適性を見極めていきます。

2.

修練期（2年）

修道院で共同生活をしながら、修道会の歴史や霊性などを学び、修道者としての最初の誓い（初誓願）を行う準備をします。

3.

有期誓願期（6年～9年）

初誓願を行うと、修道会の正式な一員となり、それぞれに与えられた場で仕事や勉学に従事しながら、自分の使命（ミッション）を確かめていきます。

終生誓願（約5ヶ月）

最終的には、神への奉仕のために一生を捧げるという誓い（終生誓願）を行うことで、養成期間が終了し、様々な場に派遣されて仕事に従事します。

4.

このようにシスターは希望すれば誰もがなれるというわけではありません。十分な時間をかけて、シスターとしての生活が神から自分に与えられたものであるのかを確かめていきます。始めは不確かだったものが祈りと共同生活を通して確かになっていく場合もありますし、その途中で別の生き方が示される場合もあります。

明治時代に初めて修道会に出会った日本の女性たちにとっては、修道生活そのものが新しいものであったというだけでなく、キリスト教に対する周囲の無理解や反発、言語も生活習慣も異なる共同体に加わる困難など、乗り越えるべきものが多くありました。それでも、遠い異国で献身的に働く外国人シスターたちの姿に触れて、シスターになろうとする日本人女性たちも数多くいたのです。

シスターになるまで

カトリック教会で大きな刷新が行われた第二バチカン公会議(1962年～1965年)
以前の伝統的な修道生活の例(細部は修道会ごとに異なる)

5:00	起床	13:30	休憩
5:30	黙想	14:30	使徒職
6:30	ミサ・聖務日課	18:00	聖務日課
7:00	朝食	18:30	夕食
8:00	使徒職	19:30	休憩
11:45	良心の糾明	20:00	聖務日課
12:00	昼食	21:00	夕の祈り
13:00	聖務日課	22:00	就寝

シスターの一日

聖務日課

もともとは司祭・修道者の務めで、毎日、朝から晩まで定められた時間に祈りを行うこと。

良心の糾明

自分の犯した過ち(罪)を振り返り、赦しの秘跡を受ける準備をすること。

使徒職

修道会ごとの目的に応じて、また各人に定められた仕事を行うこと。

修道生活では全体として、沈黙のうちに過ごすことが求められ、必要な場合以外には口を開いてはいけいとされました。食事の際にも、沈黙を守り、書物の朗読に耳を傾けたりしながら食事をするのが一般的でした。ただし、祝日などの食事では、会話が許可されることもありました。休憩時間には手仕事などをしながら団欒することが許されました。

第二バチカン公会議以降は、聖務日課なども簡素化され、生活時間割もそれぞれの修道会の目的や各人の役割などに応じて、自由が認められるようになっていきます。

日本の女子修道会の始まり

日本の女子修道会の多くは、外国から来た修道者によって設立されたものです。最初期には、フランスを拠点とするパリ外国宣教会が日本への再宣教を担ったことから、フランス系の修道会が多く来日しました。明治時代の中頃以降は、宣教の多様化を求める教皇庁の方針などにより、フランス以外からも多くの修道会が来日しました。

明治時代に来日した女子修道会

(第3章参照)

- ① サン・モール修道会(現・幼きイエス会) 1872年来日
- ② ショファイユの幼きイエズス修道会 1877年来日
- ③ シャトルル聖パウロ修道女会 1878年来日
- ④ 聖心会 1908年来日
- ⑤ 聖霊会(聖霊奉侍布教修道女会) 1908年来日

大正時代以降に来日した主な女子修道会

- ⑥ 殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道女会 1920年来日
- ⑦ ヌヴェール愛徳修道会 1921年来日
- ⑧ 聖ドミニコ宣教修道女会 1924年来日
- ⑨ ナミュール・ノートルダム修道女会 1924年来日
- ⑩ 聖心侍女修道会 1934年来日

日本で設立された女子修道会

- ⑪ 長崎純心聖母会
1934年に長崎教区によって日本人修道会として設立。

これらの女子修道会はまだ日本でキリスト教が広く受け入れられなかった時代に、それぞれの使命を果たしていきました。その生き方は、多くの日本の若い女性たちに影響を与え、その中から、その使命を共有し、共に歩もうとするシスターたちが誕生していくのです。

(注記)

これら以外に、古い起源を持つ日本の女子修道会に「お告げのマリア修道女会」があります。これは、1874年(明治7年)に、パリ外国宣教会宣教師マルク・マリー・ド・ロ(1840-1914)が潜伏キリシタンが多かった長崎で、伝染病の患者や親を亡くした孤児などの看護、救護の仕事を開始した際、これに協力した4人の浦上の独身女性グループ(「女部屋」と呼ばれた)に始まるものです。当初は、カトリック教会から公式の認可を受けた修道会の形はとっていませんでしたが、修道者的な奉獻生活を送りました(1877年には準修道会「十字会」となり、1975年には公式の修道会として認可された)。



仁慈堂で子どもの世話をする女性たち



山上カク

(写真はいずれも幼きイエス会提供)

山上カク

(サン・モール修道会)

日本人女子修道者列伝 ①

山上カク (修道名マルグリット) 1863 - 1939

サン・モール修道会(現・幼きイエス会)で最初の日本人修道者。山上カクは、東京・八王子の被差別部落で生まれ、1878年(明治11年)頃、パリ外国宣教会宣教師のジェルマン・レジェ・テストウイド(のちに神山復生病院を設立)から、一家で洗礼を受けた。兄はテストウイドのもとで伝道師として活動した。カクは18歳で同郷の山口とわと一緒にサン・モール修道会に入会し、孤児院・仁慈堂で、恵まれない子どもたちの世話に従事した。50年間の活動で3,600人の孤児の世話をしたとされる。地域の貧しい人びとや病気の人びとのためにも力を尽くし、人びとから「山の神様」と呼ばれた。1939年(昭和14年)帰天。

エピソード 1

籍のない子ども(捨て子)や、家庭で養育が困難となった子どもたちを養女として自分の戸籍に入れ、山上姓とした。孤児たちが成長し、家族・親戚に引き取られても、引き取られた先で酷使されたり、人身売買されるのを防ぐためだった。孤児たちは、施設で養育、教育されたのち、外国人や日本人の家庭にこころよく雇い入れられたという。

エピソード 2

貧しい人びとの家に、公教要理を教えに出かけたが、修道服で訪問しにくいところには、ベールを取って行った。彼女はどんな病気の人にも愛情深く接し、キリストによる救いを伝え、希望をもたらした。ハンセン病患者を見つけた時には、修道院の庭の小屋に住ませ、食事を運んだ。夜半に薬をもらいに来る人もいたので、裏口わきの三疊間で休み、すぐ起きられるようにしていた。

エピソード 3

晩年、横浜市から「子どもたち、病人、貧しい人びとのために献身したことにより」表彰された。既に病床にあった彼女に代わって、若い修道女が表彰式に出かけた。彼女は表彰状を見ても、「私が働いたのは、ただイエス様のためだけだった。」と言ったと伝えられている。

小磯エイ (修道名マリ・ジョゼフ) 1874 - 1966

シャルトル聖パウロ修道女会最初の日本人修道者の一人。秋田県生まれ。1890年(明治23年)に函館の聖保禄女学校を卒業し、入会。1895年(明治28年)から3年間、盛岡市の病院を手伝いながら、医学、薬学、看護学を学んだ。翌年、同修道会の盛岡の仁寿病院で働き始めた。1900年(明治33年)熊本県八代にいたコール神父の招きに応え、医師であったフランス人シスターら二人と共に派遣され、八代博愛医院と孤児院(現・八代ナザレ園)を開設、以後50年以上、八代の病人と身寄りのない子どもたちのために働いた。

小磯エイ

(シャルトル聖パウロ修道女会)

日本人女子修道者列伝 ②

エピソード 1

当時、八代付近に医者はいなく、フランス人の女性医師による診療を受けられ、外国製の薬が処方されること、それに加えて貧しい人は無料だったこともあり、遠方からも病人が来た。歩行困難な患者のためにはつとめて家庭を訪問し、患者との時間を少しでも長く取るために常に道を出るだけ急いで歩いてきたため、町の人々から「足の速い方」と評判になった。患者の知らせを受けると、非常に遠方でも出かけた。車を勧められることもあったが、お互いに貧しい人間だからと必ず歩くことにしていた。

エピソード 2

皮膚病で全身がただれた患者が熊本の病院から見放されて、両親にリヤカーで運ばれてきたことがあった。シスター小磯が全身を洗い清めて薬をつける治療を一週間程続けたところ、次第によくなり、やがて全快した。当時、入院患者の多くには不治の病として怖がられた肺結核が多く、入院させると近親者すらよりつかず、玄関から物を差入れてすぐ帰って行った。シスター小磯はそれが気の毒で耐えられず、母親代わりとなって世話をした。

(写真はいずれもシャルトル聖パウロ修道女会提供)



小磯エイ



修道院(左)と博愛医院(右)

修道院は「シャルトル聖パウロ修道院記念館」(国登録有形文化財)として現在も保存されている。



ローハンプトン修道院
(聖心会英国管区アーカイブ提供)



シスター岩下の銀祝(終生誓願50周年)にて
(不二聖心女子学院アーカイブズ提供)
左端 岩倉花子(姉)/右端 岩下亀代子

岩下亀代子 1894 - 1984

聖心会で最初の日本人修道者。岩下清周・幽香子の三女として東京に生まれる。5歳年上の兄がカトリック司祭となった岩下壮一である。学習院女学部(現・学習院女子中・高等科)に通いながら、聖心女子学院の語学校に寄宿し、英語を学ぶ中、麻布教会で受洗。1917年(大正6年)第一次世界大戦のさなか留学のため渡英し、翌年ロンドンのローハンプトンの聖心会に入会。1926年(大正15年/昭和元年)に終生誓願をして帰国後、小林聖心女子学院で教えた後、1928年(昭和3年)から東京の聖心女子学院高等専門学校国文科の主事を20年近く務めた。第二次世界大戦中から戦後しばらくは小林聖心女子学院で教え、聖心女子大学で修士号を取得後は同大学で教えた。1974年(昭和49年)に日本最初の女子自立援助施設として「清周寮」(現・青少年福祉センター自立援助ホーム「清周寮」)を設立、中野刑務所や府中刑務所で教誨師も務めた。1984年(昭和59年)帰天。

日本人女子修道者列伝 ③
岩下亀代子 (聖心会)

エピソード 1

学習院に通っていた頃、三光町に聖心会の学校ができると聞いて、初めて訪れ、応接間兼聖堂に掲げられていた創立者聖マダレナ=ソフィア・バラの絵を見た時に、心の中で「私の子になるのよ」と語りかけられ、それ以来、シスターになりたいと願い続けたという。

エピソード 2

シスター岩下の入会の知らせが東京の聖心女子学院に伝わるとその影響は小さくなかった。それまで、生徒も卒業生もシスターはホーリーなものとして尊敬しながらも、自分たちには近づける存在ではないと考えていた。それが日本人卒業生の間からシスターが生まれたことにより、シスターをより身近に感じるようになり、またもっと深いあこがれの対象となったという。父兄の中には子供を聖心の学校へ入れると修道女になって家庭から離れるのではないかと危惧する向きもあった。

牧野キク (殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会)

日本人女子修道者列伝 ④



牧野キク



(写真はいずれも藤女子大学アーカイブズ提供)

牧野キク (修道名ヘレナ) 1895 - 1996

殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会二人目の日本人修道者。富山市越前町で、10人兄妹の第4子として生まれた。兄がキリスト教徒となったことをきっかけに1917年(大正6年)、プロテスタントとしての洗礼を受けた。父が北海道小樽区(後の小樽市)に移住したことから、そこでキクは教員をしながら小樽カトリック教会に通うようになり、ドイツ人の司祭の指導のもと、1924年(大正13年)にカトリックに改宗した。そして受洗から2年後、同修道会の札幌マリア院に入った。その後、札幌藤高等女学校で教鞭をとり、学校の基礎を築いた。1941年(昭和16年)札幌藤高等女学校校長に就任、その後1950年(昭和25年)に藤女子短期大学学長、1961年(昭和36年)には藤女子大学学長、学校法人藤女子学園理事長など、数々の要職を務め、学園を支えた。この間、宗教学や倫理学を受け持ち、多くの学生にカトリックの精神を伝えた。1996年(平成8年)、満101歳で帰天。



ロサンゼルスに聖フランシスコ・ザビエル校(1940年1月)



明石志都香

1921年にブレトン神父によって創立された日系人学校。右端にシスター明石。
現在は Japanese Catholic Center
(写真はいずれもメリノール宣教会アーカイブズ提供)

日本人女子修道者列伝 ⑤

明石志都香

(メリノール女子修道会)

明石志都香 (修道名マリアンナ) 1899 - 1944

メリノール女子修道会で最初の東洋人修道者。北海道・留萌でカトリックの両親のもとに生まれ、洗礼を受けた。函館の聖保禄女学校で学び、シスターたちの感化を受けてトラピスチヌ修道院の志願者となったが、健康を害して退会した。1917年(大正6年)、アメリカ西岸の日本移民の支援活動をしていたアルベルト・ブルトン神父(パリ外国宣教会)の誘いに応じて、4人の仲間とともにロサンゼルスに渡航し、日本人学校などで教えた(渡航の準備の間2ヶ月間東京の聖心女子学院で英語を学んだ)。1920年メリノール宣教会がその事業を引き継いだ時、他の日本人は帰国したが(これが聖母訪問会となった)、彼女はただ一人残り、翌年にメリノール女子修道会に入会した(1925年終生誓願)。シアトルやロサンゼルスで働き、第二次世界大戦の勃発後はニューヨークの修道会本部に戻ったが、ガンを発病し、1944年に帰天した。

エピソード 1

兄は、聖マリアンナ医科大学の創設者明石嘉門(1897-1973)。嘉門は1947年(昭和22年)に川崎市に東横病院(2024年閉院)を開設するに当たり、その母体として宗教法人を創立し、その名前を妹の修道名「マリアンナ」から取って「聖マリアンナ会」と名付けた。これがのちに大学の名前にもなった。

エピソード 2

修道者は一度派遣されると故郷に戻ることは難しかったが、健康を害したため、総長の特別なはからいで1935年10月に一時帰国し、親族のいた大津(その縁で日本最初のメリノール宣教会の教会があった)で静養し、1938年に再びロサンゼルスに戻った。

日本人女子修道者列伝 ⑥

上妻久恵

(聖ドミニコ宣教修道女会)

上妻久恵 (修道名マリア・ローサ) 1905 - 2007

聖ドミニコ宣教修道女会の最初の日本人修道者には、フィリピンで修練を受け、日本に戻ったのシスターがいるが、日本で入会したシスターの一人。
熊本県生まれ。1928年(昭和3年)に東京和洋女子専門学校高等師範科を卒業し、聖ドミニコ宣教修道女会が1925年に松山に設立した美善女学校(現・聖カタリナ学園高等学校)で教えた。2年後に退職し、大分県立高田高等女学校で教えた。1934年(昭和9年)、聖ドミニコ宣教修道女会に入会、1937年(昭和12年)初誓願後、松山女子商業学校(前身は美善女学校)で教えた。1940年(昭和15年)終生誓願。戦時下で、外国人理事長が認められなくなったため、1942年(昭和17年)36歳で理事長に就任し、以後40年以上務めた。1945年(昭和20年)7月の松山大空襲で校舎が全焼するなど、戦中戦後の困難な時代を通して、在任中に5幼稚園、3高等学校、1短期大学を創設し学校法人聖カタリナ学園の基礎を確立した。

エピソード 1

高田高等女学校の教師時代に、美善女学校の同僚だったシスターの誘いを受けて、入会を志したという。体調を崩し、いったんは入会をためらったが、その時届いたシスターの電報に神の御旨を感じて決意したという。入会の日、洗礼を受けた時には怒って勘当までした父親が、修道院まで送り届けてくれた。

エピソード 2

太平洋戦争の勃発後は、憲兵や特高警察がしきりに訪れるようになり、絶えず監視を受けた。天皇を拝まないこと詰問された時には、国家主義の教科書とされた『国体の本義』を取り出して、「天皇は絶対神や全知全能の神とは異なる神である」(p.23)と述べられている箇所を示し、天皇には最大の敬礼を示して忠義を尽くすが、全知全能の神だけを拝むのだと言ったという。また、「産めよ増やせよ」が掲げられていた時代に結婚せず、子どもも産まないのは国策に反すると言われた際にも、結婚したからといっても子どもが生まれるわけではない、私たちの仕事は、生まれた子どもたちを神の子として大切に育てていると言って反論した。



1925年創立時の美善女学校



上妻久恵

(写真はいずれも「聖ドミニコ宣教修道女会日本本部松山修道院創立史」より)



藤森さと



善光寺裏の千鳥ヶ池に開設された長野修院

(写真はいずれも清泉女子大学史料室提供)

藤森さと (聖心侍女修道会)

日本人女子修道者列伝 7

藤森さと (修道名 マグダレナ) 1913 - 2013

聖心侍女修道会最初の日本修道者。長野県諏訪生まれ。諏訪高等女学校を経て、1934年(昭和9年)東京女子大学卒業。その間、1933年(昭和8年)にカトリックの洗礼を受けた。1937年(昭和12年)に聖心侍女修道会に入る。1947年(昭和22年)清泉女学院小学校長に就任。1948年(昭和23年)から2年間、ローマの本部で修練(1949年終生誓願)。以後、清泉幼稚園長、長野清泉女学院中・高等学校、清泉女子専門学校、清泉保育女子専門学校の各校長などを歴任。1981年(昭和56年)から1988年(昭和63年)まで長野県の清泉女学院短期大学学長を務めるかたわら、県社会福祉協議会児童福祉部会委員、同副会長を務め、長野県の学校教育、社会教育に尽力した。2013年(平成25年)100歳で帰天。

エピソード 1

信州の諏訪で生まれ育ち、子どもの頃から読書が大好きで、女学校時代より「アララギ」派の歌人について短歌を作るなど典型的な文学少女であった。一方で、裁縫などは苦手で、学校での裁縫の時間には、広げた布の上に本を置いて読んでいて、家で姉に仕上げてもらっていたという。女学校の二年生の秋に、街の本屋で書名に惹かれて買った二冊の本、トマス・ア・ケンピス『キリストに倣いて』とアウグスティヌス『告白録』とによってキリスト教に出会った。

エピソード 2

プロテスタントの東京女子大学在学中に学ぶ意味や人生の意味に悩むうち、大学をやめて、障がいをもった人びとのために生きたいなど思うようになった。授業に出ないで寮に閉じこもっているのを見た舎監に声をかけられ、相談したところ、カトリック大神学校の院長だったカンドウ神父を紹介された。会ったその日に4時間にわたり神父に質問を投げかけ、その答えを聞くうち、「ここに自分が求めている真理がある」と直感し、それからカンドウ神父のもとに通って学び、洗礼を受けた。